

## 妖怪たちは加速する

— 怪異・妖怪研究文献紹介 二〇〇七～二〇〇九 —

飯倉 義之

れた「国立メディア芸術総合センター」であった。日本のメディア芸術、とりわけマンガ・アニメは、強い国際競争力を期待される産業としても注目を集めている。

第二次都市伝説ブーム、第三次妖怪ブー

かつて本誌において、都市伝説をめぐる

歴史博物館と京都国際マンガミュージアムが共催した特別展「妖怪天国ニッポン！

ムなどと言われて久しい時間が経過した。ミレニアム前後から始まった妖怪・心霊・オカルト分野への興味は失速することなく、怪異・妖怪を主題とする研究成果や、それらを題材にしたマンガ、ゲーム、イベント、アニメ、映画などの創造物は、数を減らすことなく生産され続けている。怪

社会情勢と研究状況について一応の整理をした。<sup>①</sup> 本稿では怪異・妖怪研究の現状を整理していきたい。なお、今回主として紹介する図書には発行元、刊行年月、本体価格を記した。それ以外の図書は発行元と刊行年のみとした。

— 絵巻からマンガまで — が、二〇〇九年春に兵庫県立歴史博物館で、夏には京都国際マンガミュージアムで開催された。同展のポスターに「妖怪は江戸時代からマンガだった!!」とある。そのアオリどおりに同展は、現在の妖怪マンガの淵源を江戸時代の妖怪画までさかのぼり、その通俗的な妖怪像・妖怪イメージの形成と変遷を、豊富な画像資料を駆使して提示する。

異・妖怪という〈コンテンツ〉は、「ブーム」として祀り上げられ、祀り捨てられる状態を乗り越えて、「ジャンル」として定

一 妖怪天国ニッポン！

— 図説 妖怪画の系譜 —

着したかに思える。そうした怪異・妖怪への関心が単なるブームに終わらず継続し

二〇〇九年秋の民主党の劇的な勝利であらゆる政策が大きく転換した。自由民主党が掲げていた政策がいくつも中止、もしくは凍結となった。その中でも特に世の中

の耳目を集めた構想は、「アニメの殿堂」と名づけられ「国営マンガ喫茶」と批判さ

妖研究が屋台骨となつて、読者・視聴者の知的好奇心を支え続けていることが指摘できる。

中の耳目を集めた構想は、「アニメの殿堂」と名づけられ「国営マンガ喫茶」と批判さ

そうした時勢を反映してか、兵庫県立歴史博物館と京都国際マンガミュージアムが共催した特別展「妖怪天国ニッポン！

した黄表紙・合巻、めんこ・双六などの「おもちゃ絵」などで形成され、昭和の紙芝居と貸本の妖怪たちを経て、水木しげるが『ゲゲゲの鬼太郎』等の作品を通じて確立した、現在の「妖怪マンガ」へと至る妖怪画の系譜が丁寧に辿られている。

同展では、現在の妖怪マンガ文化を、同展の中心人物である兵庫県立歴史博物館学芸員の香川雅信が、その著書『江戸の妖怪革命』（河出書房新社、二〇〇六年）で描き出した江戸文化における妖怪のキャラクター化（＝江戸の妖怪革命）の先に据えることで、妖怪文化の伝統と創造の系譜を示すことに成功している。そうした怪異・妖怪の表わされ方の変遷は、口承文芸における怪異・妖怪の語られ方にも影響を与えているはずだ。

## 二 妖怪研究、西へ

— 国際日本文化研究センターと東京  
— ジア怪異学会 —

博物館における妖怪企画展は、川崎市市

民ミュージアムが一九九三年に「妖怪展—現代に蘇る百鬼夜行」で先鞭をつけたものであるが、以来毎夏の恒例行事となりつつある。二〇〇九年夏にも、青森県立郷土館では特別展「妖怪展—神・もののけ・折り—」が開催され、展示された郷土の妖怪資料が話題を呼んだ<sup>2)</sup>。同じ時期に、独立行政法人人間文化研究機構に属する国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館・国際日本文化研究センターが共同し、連携展示「百鬼夜行の世界」を開催、百鬼夜行絵巻の展示や講演会を行った。同展の図録は『百鬼夜行の世界』（角川学芸出版、二〇〇九年）として市販されている。

同展の主催団体のひとつである、京都の国際日本文化研究センター（以下、日文研）は、現在の怪異・妖怪研究の中心のひとつでもある。日文研の怪異・妖怪研究は小松和彦の共同研究を軸としている。小松のプロジェクトは民俗学研究誌や都道府県史、『日本随筆大成』等から怪異・妖怪資料を収録した「怪異・妖怪伝承データベース」(<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/index.html>)を二〇一二年に公開、共同研究報告書として『日本妖怪学大全』（小松和彦編著、小学館、二〇〇三年）、『日本人の異界観』（同、せりか書房、二〇〇六年）、『妖怪文化研究の最前線』（同、二〇〇九年）を刊行、さらに二〇一〇年には「怪異・妖怪画像データベース」のWeb公開を予定するなど、多くの研究者の参加を得て活発な活動を続けている。

共同研究参加者も個々に刺激的な著作を発表し続けている。たとえば参加者の一人、佐々木高弘は『怪異の風景学—妖怪文化の民俗地理—』（古今書院、二〇〇九年四月、二九四〇円）をまとめた。佐々木は人文地理学の手法を用いて、怪異が起こるとされる場所には、その怪異を見る人たちが合意する特定の「場所のセンス」、すなわち歴史的・社会的に構築された「怪異の見える風景」があることを論じ、唯心論的に論じられがちである怪異・妖怪伝承を、現実の社会状況や地理条件と連続させて論じること成功している。

ほかの共同研究者も、横山泰子が『江戸歌舞伎の怪談と化け物』（講談社「選書メチエ」、二〇〇八年）、堤邦彦が『現代語で読む「江戸怪談」傑作選』（祥伝社「祥伝社新書」、二〇〇八年）を刊行するなど、活発な研究活動がなされている。

小松は、日本人の神観念や民俗宗教、異界観を論ずる過程において怪異・妖怪に注目し、結果としてそれが人文科学の対象として論じうることを示した。そうした小

松の怪異・妖怪研究は、総合的な人間科学研究としての姿勢を色濃く見せる。小松は「妖怪」概念を「出来事としての妖怪（現象―妖怪）」「超自然的存在としての妖怪（存在―妖怪）」「造形化された妖怪（造形―妖怪）」の三つの意味領域に分けて定義する。①「出来事としての妖怪」は、山中で怪音を聞いた、怪しい火を見たなどの、直接体験としての怪異現象である。そうした怪異体験が語り継がれる過程で、そのような現象を引き起こす「超自然的な何か」の存在が名付けられる（②「超自然的存在としての妖怪」）。そして怪異現象が「名付

け」られて、一個の妖怪存在として認識され、絵画や立体物に造形化され、創作の中でキャラクター化されるようになる。これが③「造形化された妖怪」である。現象―妖怪、存在―妖怪、造形―妖怪の3つの位相は、いずれも現象や知識に対する人間の側の反応である。小松の怪異・妖怪研究は、「妖怪」を実体的に扱うものではなく、人間の社会と文化の反映と位置づける研究姿勢であるといえる。

小松和彦（編著）『図解雑学 日本妖怪』（ナツメ社、二〇〇九年八月、一五七五円）も、そうした妖怪観に沿って編集された、妖怪研究の平易な入門書である。同書の特徴は、マンガやアニメといったポピュラーカルチャーで得た興味から妖怪研究を志して大学へ進学し、民俗学を志望する学生を対象に向けて書かれた点にある。同書は妖怪研究の入門書であると同時に、文学・歴史学・民俗学の若い書き手たちが、現在の妖怪研究のトピックがどこにあるかを示した、怪異・妖怪研究のワードマップともなっている。

怪異・妖怪研究のもうひとつの中心地もまた近畿圏に存在する<sup>3</sup>。京阪神の歴史学研究者を中心に結成された、東アジア怪異学会がそれである。同会は二〇〇一年の結成以来、歴史学を軸に、国文学・地理学・民俗学・宗教学等の多分野からの、大学院生を中心とする若い会員による学際的な議論を積み重ねている。その成果として、学会の編集による『怪異学の技法』（臨川書院、二〇〇三年）、『亀ト―歴史の地層に秘められたうらないの技をほりおこす―』（臨川書院、二〇〇六年）の二冊を世に問うている。

東アジア怪異学会はその綱領に（1）東アジア文化圏における「怪異」のあり方の把握、（2）「怪異」という言葉の持つ歴史的有用性の発見と解説、（3）「怪異」現象として表れる表象文化の解説、（4）前近代王権論を読み解く方法論的ツールとしての「怪異」の位置づけ、を挙げる。この綱領に謳われるように、東アジア怪異学会は「怪異」を没歴史的な現象として分析・

記述してきたこれまでの怪異・妖怪研究を批判し、前近代史料の中の「怪異」を一般的な不思議な現象としてとらえるのではなく、特定の時代に記された歴史用語として認識し、その史料が記述された時代状況

と社会情勢に鑑みて定位する、時系列的なまなざしの意義を強調する。同会が近代以降に通俗語・学術用語として成立した「妖怪」を退け、史書の用字である「怪異」を名乗るのも、そうした意識の表れである。

そうして、歴史用語としての「怪異」は、前近代、古代から中世にかけての「王権」のありかたを読み解く方法的ツールとして有効であることを、同会は指摘する。東アジア怪異学会三冊目の論文集となる『怪異学の可能性』（角川書店、二〇〇九年三月、三二五〇円）は、この怪異と前近代王権の関わりに主眼がおかれた論集となっている。

怪異学会の王権論は、怪異の解釈の主体をめぐる議論である。古代においては国家が陰陽道などの高度な知識の体系を用いて「怪異」を独占的に管理することで、民

衆の霊的な生活を秩序立て、文化的なヘゲモニーを確立してきた。しかし中世になると王権が霊的秩序を与える権勢を喪失し、室町以降怪異は世俗化していったという筋道を描き出している。

こうした前近代王権論としての怪異研究の大きな成果として、榎村寛之の一連の仕事が目される。特に榎村寛之『古代の都と神々―怪異を吸い取る神社―』（吉川弘文館「歴史文化ライブラリー」、二〇〇八年）では榎村は、清浄な場としてとらえられがちな神社が、古代においては怪異の収納の場所としても機能していたことを大胆に指摘する。

東アジア怪異学会は日本で唯一の怪談専門誌を名乗る雑誌『幽』へのコラム連載など、学術の枠を乗り越えて、活動の幅を広げている。

### 三 怪談研究、東へ

―オカルト研究会と東雅夫―

近畿圏の怪異・妖怪研究は民俗学・人類

学・歴史学と近いものであったが、関東圏の怪異・妖怪研究は文学研究・メディア研究と結びついている。近代文学研究の一柳廣孝・吉田司雄を中心とした有志の集い、通称「オカルト研究会」は、近代の

心霊科学や戦後のオカルト、現代のスピリチュアルなどの流行がどのように発生し、それが近現代日本人の社会文化や思考の枠組みにいかなる影響を与えたのかを、文学・社会学・宗教学・民俗学の研究者が各分野の知見を持ち寄って論じている。

その成果は一柳・吉田の編集による青弓社「ナイトメア叢書」（『ホラー・ジャパネスタの現在』二〇〇五年、『幻想文学、近代の魔界へ』二〇〇六年、『妖怪は繁殖する』二〇〇六年、『映画の恐怖』二〇〇七年、『霊はどこにいたのか』二〇〇七年、『女は変身する』二〇〇八年、いずれも青弓社）や、論集『オカルトの帝国』（一柳編著、同前、二〇〇六年）として刊行されている。

オカルト研究会二冊目の論集である吉田司雄（編著）『オカルトの惑星』（同

前、二〇〇九年二月、二一〇〇円）は、一九七〇年代のオカルトブームを論じた前著に続き、一九八〇年代・九〇年代のポスト・オカルトブームと、一九六〇年代のオカルト前史を論じる。具体例として前者は邪馬台国論争と超古代史、UFOと宇宙考古学、シャンバラやニューエイジに代表される精神世界のブームを、後者は〈秘境〉ブームと学術探検を例に挙げる。一九七〇年代にマスメディアののって日常化し、娯楽として消費される情報となったこうしたオカルトの知識は、一九八〇年代以降のポピュラー・カルチャーの基礎となっている。そうしたオカルト知識の基とした思考の枠組みは、現在の世間話や都市伝説を通底し、再生産され続けている。

こうしたオカルト的な知識の再生産に大きく寄与する分野のひとつに、ライトノベルがある。ライトノベルとは青少年向けに発売される娯楽小説の一ジャンルであるが、特定のレーベル（角川スニーカー文庫、電撃文庫、など）による出版形態と、アニメ・マンガの表現と共通性を強く持つ

こと、文学的であるよりも商業的な性格が強く、メディアミックスを志向することに特徴がある。こうしたライトノベルは現代文学・児童文学研究のうちで等閑視されてきたが、一柳廣孝・久米依子（編著）『ライトノベル研究序説』（青弓社、二〇〇九年四月、二一〇〇円）が、この分野に切り込んだ。同書は序説と銘打つように、個々の論は未だ端緒に着いたばかりという感が否めないが、文学研究の視座から作品論・作家論を展開するのみならず、商品としての本の作られ方・売られ方（装丁・挿絵・販売・編集・宣伝）までも文学研究のうちに位置づける野心的な試みがなされている。マスメディアやコマーションイズムを対象の一部として受け止め、考察し分析する手つきは、「民話の語り部」や口承文芸の商業化、伝説・昔話の観光化と向き合わなくてはならない、いま・ここのわれわれのヒントになるはずだ。

怪異・妖怪研究に戻る。オカルト研究会の参加者でもある谷口基は二〇〇九年、『戦前戦後異端文学論』（新典社）、『怪談異譚』（水声社）の二冊を続けて世に問うた。前者の都市伝説への視座、後者の現代民話の「平和教材としての怪談」への指摘は注目される。

また、怪異・妖怪研究において近年、文芸評論家でアンソロジストの東雅夫の活動がめざましい。評論誌『幻想文学』の編集長を創刊から終刊まで務め、現在は先に触れた怪談専門雑誌『幽』の編集長を務める東は、『江戸東京怪談文学散歩』（角川学芸出版「角川選書」二〇〇八年）、『怪談文芸ハンドブック』（メディアファクトリー、二〇〇九年）、『日本幻想作家事典』（石堂藍と共編、国書刊行会、二〇〇九年）等の著作で近現代文学を「怪談」という視座から整理し、新たな日本文学史を描き出すことに成功している。

東が近年手がける「文豪怪談傑作選」シリーズ（筑摩書房「ちくま文庫」）は、これまで近代文学の至宝として読まれてきた文豪の作品を、大胆にも「怪談」として読みなおすという視角から編まれている。川端康成や森鴎外、太宰治、三島由

紀夫らに加え、柳田國男、折口信夫の論文・随筆も「怪談」として捉えなおされている（『文豪怪談傑作選 柳田國男集』二〇〇七年、『文豪怪談傑作選 折口信夫集』二〇〇九年）。明治の知識人層の怪談趣味を考えるとき、こうした試みは柳田・折口の読みに新たな局面を付け加えるものとなるかもしれない。明治の「怪談」に注目した仕事としては、一柳廣孝・近藤瑞木（編）『幕末明治百物語』（国書刊行会、二〇〇九年）もある。

以上のように、近現代文学研究における怪異の表象とその分析については述べるべき点が多い。清水潤「研究動向 ホラー」『昭和文学研究』五九（昭和文学会、二〇〇九年）が多くの論点を鮮やかに整理しており、現状を把握する参考になる。

#### 四 この世には不思議なことなど何も無い

##### —京極夏彦『妖怪の理 妖怪の檻』—

日文研・東アジア恠異学会・オカルト研究会・東雅夫を中心に、恠異・妖怪研究の

現状を整理した。実はこうした研究の現状を伏流水のように繋ぐ人と本がある。その人物とは京極夏彦、その本とは京極の『妖怪の理 妖怪の檻』（角川書店、二〇〇七年九月、一八九〇円）である。

京極は『姑獲鳥の夏』を皮切りに、妖怪を重要なモチーフとした小説シリーズを世に送り出した、いわずと知れたベストセラー作家である。また水木しげるを師と仰ぐ「関東水木会」では水木の妖怪作品のプロデュースに携わり、世界妖怪協会評議員としては雑誌『怪』（角川書店）に、「怪談之怪」発起人としては雑誌『幽』に協力するなど、まさに妖怪のマルチクリエイターといえる。と同時に、日文研の共同研究や東アジア恠異学会に参加し成果報告書に寄稿するなど、アカデミズム外の妖怪研究者としても実績をあげている。

京極の『妖怪の理、妖怪の檻』は雑誌『怪』連載をまとめたもので、現在一般に〈妖怪〉として想起されるイメージを「通俗的妖怪概念」と名づけ、その成立を丹念に論じたものである。同書の前半は、井上

円了・柳田國男・江馬務・藤澤衛彦の妖怪研究の特質と差異を周到に論じ、妖怪研究の学史を描くことに成功している。後半部は「通俗的妖怪概念」について、「夜道で行く手を阻まれる」などの「コト」であった怪異現象が、「ぬりかべ」などと「名付け」られることで、あたかもその怪異を起す「モノ（＝妖怪）」が存在するかのよう

に受け止められ、そうした存在＝妖怪が「キャラクター化」されて、メディアによつて広められることで成立した、と整理する。そうして戦後、妖怪の「キャラクター化」と「メディアでのイメージの普及」を推し進めたのが、『ゲゲゲの鬼太郎』を中心とする水木しげるの妖怪マンガ作品であった、と論じる。同書は、学問と世間とでかなりの隔たりのある、学術用語としての「恠異・妖怪」と「通俗的妖怪概念」の断絶の淵源を探り、その架橋を図つた意欲的な著作といふことができる。

恠異・妖怪現象のような、元来個人の奥や限られたコミュニティでのみ通用していたはずの経験が、名付けによつて体験

のレベルから語りのレベルに乖離し、さらに図像を与えられることによってマスメディアを通じて増幅するという京極の論は、「語りの形成」の点からも注目に値する。また妖怪を「モノ化するコト」とまとめた視点は、小松の妖怪文化研究や、山田巖子の「名付け」へのまなざしとも通底する。こうした知見は、昔話や伝説の成立<sup>4</sup>の変容の分析にも新たな視座をあたえうるのではない。

だが同書は、そうした刺激的な論点と豊富な資料にもかかわらず、関連学会誌で目だった書評がなされなかった。発表誌が『怪』という妖怪ファン向けの雑誌であったことや、京極の小説と同じ一般向けの文芸書レベルからの刊行であったことが、研究者が本書の価値を見落とした一つの理由であるだろう。また、京極の作家としてのビッグネームも、研究という領域ではかえってマイナスに働きかねない。だが同書は、そうした『アカデミズムの理 アカデミズムの檻』を越えて、怪異・妖怪研究の組上に載せられるべき一書といえる。

## 五 怪異・妖怪研究の資料的困難

### ―『明治期怪異妖怪記事資料集成』―

以上述べてきた怪異・妖怪研究における大きな困難は、そうした領域が長らく研究对象とされてこなかったがために、信頼できる近過去の一次資料に乏しく、娯楽的・創作的な怪談資料やマス・ジャーナリズムが報じた興味本位の資料に頼らざるを得ないという点にある。そうした資料は新聞や雑誌などに多く含まれるために、膨大で体系化もなされておらず、資料調査も大宅壮一文庫の目録を手当たり次第に見るなど、行き当たりばったりにならざるを得ない。資料の収集が困難となると、いきおい資料批判も十分とはいえなくなる。

こうした怪異・妖怪資料の量的な困難に個人で挑戦した労作が、湯本豪一『明治期怪異妖怪記事資料集成』（国書刊行会、二〇〇九年一月、四七二五〇円）である。同書は国立国会図書館・日本新聞博物館所蔵の邦字新聞から、明治年間の怪異・妖怪

記事を抽出し、影印翻刻をした、A4版・本文一二八六頁（+記事内容一覧六八頁）の大著である。

湯本は、川崎市市民ミュージアムで先に触れた「妖怪展」や「日本の幻獣」展を開催した学芸員であり、明治期の怪異・妖怪記事を解説した『明治妖怪新聞』（柏書房、一九九九年）、『地方発明治妖怪ニュース』（同、二〇〇一年）の著書がある。湯本の著作は、怪異・妖怪記事の集成と資料批判は困難ではあっても不可能ではないこと、まだ十分に参照されていない資料に多くの論点があることを気づかせてくれる。『明治期怪異妖怪記事資料集成』の開いてくれる地平に依ってその膨大な資料をきちんと論じ、さらに新たな資料を付け加えていけるかどうか、怪異・妖怪研究の今後を左右するだろう。

付け加えれば、上記の怪異・妖怪論は、人間の死後の（稀に生者の）靈魂の発現である「幽霊」をも怪異・妖怪に含んで考察している点ではみな共通する。そう

した「幽霊」のとらえ方を問い直したのが、大島清昭『現代幽霊論』（岩田書院、二〇〇七年一〇月、五一―四五頁）である。大島は「幽霊」を「妖怪」とは異なる関心によるものであるとして、日本民俗学が培ってきた靈魂観の研究を基礎とし、心靈科学やスピリチュアリズム、学校の怪談や都市伝説までも視野に入れつつ「幽霊」を論じている。

大島は人間の靈魂の出現形態を生霊／死霊／境界例に分け、さらにそれを可視／不可視の軸で分類し、得られた15のカテゴリを「靈魂チャート」としてまとめる。このチャートは現代の幽霊の事例を分類するのに便利であり、現代人が持つ「幽霊」の心意の研究への足がかりとなりうるものである。しかし大島の論は事例のカテゴリライズに終始し、現代の幽霊がなぜこのような出現の形態を取るのかについて触れるところが少なく、幽霊を怪異・妖怪研究から独立させて論じる説得性に欠ける。幽霊の研究が怪異・妖怪研究のうちでも進まないのも、幽霊がマスメディアの文脈

で娯楽的な扱われ方をされ続けていることと関連があるはずだ。研究者は毎夏生み出される、そのキワモノ的で暴力的な量の資料を前に、「幽霊」を包括的に論じることをあきらめてしまいがちである。

しかし、湯本の著作が明治期の膨大な新聞資料の通覧を可能としたように、幽霊資料もまた、膨大ではあっても有限である。口承文芸・民話研究者を軸とする、不思議な世界を考える会（編集・発行）『不思議な世界を考える？ 公会報』には、週刊誌目次より心靈・オカルト・都市伝説等の記事を通覧した、渡辺節子「雑誌、週刊誌に見る不思議な話・変な話」が年に一度掲載されている。こうした貴重な仕事から、現代の幽霊譚の基礎資料を構築していくことができるはずだ。真の現代幽霊論は、こうした地道な資料の整備を基にした比較によってのみ、確立するものだろう。

以上、近年の怪異・妖怪研究の状況を概説した。この分野の本格的な研究はまだ始まったばかりだといえる。

注

- (1) 飯倉義之「都市伝説は陰謀する―二〇〇〇年代後半の「都市伝説」ブーム・走り書き―」本誌三十一号、二〇〇八年。
  - (2) 佐々木達司「好評だった青森の妖怪展」『伝え』四六、日本口承文芸学会、二〇一〇年二月。
  - (3) 土居浩「京都を舞台とする妖怪・怪異研究―東アジア怪異学会編『怪異学の技法』を読む―」『京都民俗』二〇・二一、京都民俗学談話会、二〇〇四年三月。
  - (4) 山田巖子「目の想像力／耳の想像力―語彙研究の可能性―」本誌二十八号、二〇〇五年。
- (いいくら・よしゆき／国際日本文化研究センター機関研究員)